

# 8世紀アンダルスとイフリーキヤ におけるアラブ初期移住者

——フィフル家を中心に——

佐藤健太郎

## はじめに

138/756年、ウマイヤ家のアブド・アッラフマーン1世（在位138/756～172/788年）がコルドバを占領し、アンダルスの後ウマイヤ朝が成立した。以後、この後ウマイヤ朝政権が、11世紀初頭までアンダルスを支配することになる。しかし、この後ウマイヤ朝政権の支配が現実にはどれほど地方まで浸透していたのかについては、疑問も多い。少なくとも、2/8世紀から3/9世紀には、辺境地帯を中心にアラブの地方有力者による反乱が相次いでおり、名目的な服従と引き換えに彼らの実質的な支配がコルドバ政権により承認されるという例がしばしば見られる<sup>(1)</sup>。

したがって、後ウマイヤ朝のアンダルス支配を考える際には、コルドバの中央政府だけではなく、こうした地方有力者の存在にも着目する必要がある。本稿の目的は、92/711年のアンダルス征服以後のこれらアラブ地方有力者の形成とその性格について検討することである。

このようなアラブ地方有力者たちは、史料中では ahl al-balad あるいは baladiyūn と呼ばれている。balad とは「土地」や「くに」といった意味であるから、直訳すれば「その土地の人々」あるいは「地元民」となろう。本稿では、被征服民である西ゴート系住民やラテン系住民、ギリシア系住民と区別するため、彼らのことを「初期移住者」という訳語で扱う<sup>(2)</sup>。そもそもこの ahl al-balad と

いう語は、その「くに」以外の人々、すなわちアンダルスの外から派遣されて来た歴代の総督や740年代に大量に流入して来たシリア軍<sup>(3)</sup>、そしてアブド・アッラフマーン1世といたった彼らにとっての「よそも」の存在を前提にした言葉である。

これら初期移住者の中で地方有力者として台頭するようになるのは、特に名士(wujūh)と呼ばれるような人々である。史料中では、征服に際して果たした役割、血統、財産など様々な要素により、他の初期移住者より優越した立場にある者がこう呼ばれている。本稿では、多くの初期移住者の名士たちの中でも最も情報量の豊富なフィフルFihl 家を検討対象として、初期移住者の性格を明らかにしたい。フィフル家は、ウマイヤ朝からアッバース朝への政権交替に伴うイスラーム世界中央の政治的混乱に乗じて、アンダルス総督として半独立の政権を樹立したユースフ・アルフィフリー Yūsuf b. ‘Abd al-Raḥmān al-Fihri (在任130/747~138/756年)の家系である。

なお、この時期のアンダルスについては、非常に史料が少なく情報に乏しい。そこで、本稿では扱う対象をアンダルスだけでなく、アンダルスと密接な関係にあるイフリーキヤ<sup>(4)</sup>にも広げる。イフリーキヤは8世紀初めのアンダルス征服の基地となり、その後も盛んに交流のあった地域である。したがって、多くの初期移住者の一族はアンダルスとイフリーキヤの両方にまたがって分布していた。また、アンダルスのユースフ・アルフィフリー政権とほぼ同じ時期に、やはり同じフィフル家のアブド・アッラフマーン・アルフィフリー ‘Abd al-Raḥmān b. Ḥabīb al-Fihri (在任127/745年~137/755年)が事実上独立した政権を樹立した地域でもある。従って、アンダルスの初期移住者やフィフル家の性格を明らかにするうえで、イフリーキヤをもその検討の対象とするのは必要不可欠の作業でもある。

8世紀の初期移住者については、先行研究は極めて少ない。その中で、初期移住者が都市だけでなくアンダルス各地の比較的小さな町にまで居住していたことや、征服者としての既得権益を守ろうとして、しばしばカリフから派遣された総督やシリア軍に対して彼ら

が抵抗した事を詳細に論じたターハの成果は注目すべきものである<sup>(5)</sup>。

また、フィフル家が740~50年代にかけて樹立した半独立の政権については、後ウマイヤ朝において完成するアンダルス自立化や王朝樹立への過渡期とする評価が主である<sup>(6)</sup>。しかし、初期移住者のよそものに対する反感を考えれば、表面的な政権樹立という現象だけによって、初期移住者のフィフル家と後ウマイヤ朝とを同一次元において論じることは出来ない。本稿では、初期移住者がやがて後ウマイヤ朝の地方支配の不安要因になる事を念頭において、8世紀のフィフル家について検討する。

史料としては、初期アンダルス史の常として、同時代史料はほとんど残っていない。唯一の同時代史料は、ラテン語の年代記であるが、初期移住者についての情報量は少ない。アラビア語史料の多くはしばしばより古い著作の引用を行っており、本稿で用いた史料の多くはそうした過去の著作の引用である。以下に本稿で用いた主な史料とその略号を挙げておく。

*Futūḥ Miṣr* : Ibn 'Abd al-Ḥakam, *Futūḥ Miṣr wa Akhbār-hā*, C.C. Torrey ed., New Haven, 1922.

*Raqīq* : Ibrāhīm al-Raqīq. *Ta'riḫ Ifrīqiya wa al-Maghrib*, A.A. al-Zaydān & I.U.A. Mūsā ed., Bayrūt, 1990.

*Qūṭīya* : Ibn al-Qūṭīya, *Ta'riḫ Iftitāḥ al-Andalus*, Ibrāhīm al-Abyārī ed., al-Qāhira, 1982.

*Akhhbār Majmū'a* : Anonymous, *Akhhbār Majmū'a*, Ibrāhīm al-Abyārī ed., al-Qāhira, 1989.

*Fatḥ al-Andalus* : Anonymous, *Fatho-l-Andaluḥi (Dhikr Fatḥ al-Andalus wa Umarā'-hā)*, Don Joaquín de González ed., Argel, 1889.

*Jamhara* : Ibn Ḥazm, *Jamhara Ansāb al-'Arab*, A.M. Hārūn ed., al-Qāhira, n.d.

*Ḥulla* : Ibn al-Abbār *Al-Ḥulla al-Siyarā'*, 2vols., Ḥusayn Mu'nis ed., al-Qāhira, 1963.

*Bayān*: Ibn 'Idhārī, *Al-Bayān al-Mughrib fī Akhbār al-Andalus wa al-Maghrib*, 4vols., É. Lévi-Provençal & G.S. Colin & I. 'Abbās ed., Bayrūt, 1983 repr.

*Nafḥ*: Al-Maqqarī, *Nafḥ al-Ṭīb min Ghuṣn al-Andalus al-Raṭīb*, 8vols., I. 'Abbās ed., Bayrūt, 1968.

*Chr.754*: Anonymous, *Chronica Mvzarabica*, in Ioannes Gil ed., *Corpus Scriptorum Mvzarabicorum*, 2vols., Madrid, 1973, vol. 1, pp.15-54.

## 1 フィフル家の構成員

フィフルとは、メッカのクライシュ Quraysh 族の祖とされるクライシュの別名である。従って、フィフル家とは広い意味で取ればそのままクライシュ族と同義になってしまう。しかし、クライシュ族であっても、Qurashī としか表現されない人物も多い。*Nafḥ* が 11世紀の Ibn Ghālib を引用するところによれば、アンダルスでフィフル家 Fihriyūn として知られるのは、フィフル (クライシュ) の子のうちハーリス Ḥārith とムハーリブ Muḥārib の子孫であり、この二人の子孫がアンダルスのクライシュ族の中では数が多いという<sup>(7)</sup>。その中でも、特に史料によく現れるのが、ハーリスの系統に属するウクバ・ブン・ナーフィー 'Uqba b. Nāfi' (d. 63/683年) の子孫である。

ウクバは、7世紀末の北アフリカ征服の指揮官であり、史料中ではしばしば、ジハードの戦士や北アフリカの首都カイラワーンの建設者として登場する。彼が、西へ征服を続けてついに大西洋に至った時、「神よ、もしこの海がわたしを妨げなければ、さらにイスラームを護り、不信仰者どもを打ち砕いて行けたものを」と嘆息したというよく知られた伝説は、ジハードの戦士としての彼に対する後世の評価をよく示している<sup>(8)</sup>。後に述べるように、このような彼に対する評価が、その子孫たちのイフリーキヤとアンダルスにおける社会的地位に大きく影響することになる。以下、フィフル家の者 (Fihri) と呼ばれる人物のうちウクバの子孫にあたる人物を幾人か



挙げてみよう。

ウクバの息子の名は、Abū ‘Ubayda, ‘Uthmān, ‘Iyāḍの三人が知られている。そのうちイヤードは、アンダルス征服に参加したアラブ戦士の一員であり、その中の wujūh の一員であるとされている<sup>(9)</sup>。彼は、征服の際、戦利品の分配に立ち会いながらも自らは分け前を欲しなかった高潔な人物であり、またアンダルスには数少ないイスラームの第二世代タービウーンの一人として史料には描かれている。

また、アブー・ウバイダの二人の息子‘Abd al-Raḥmān b. Abī ‘Ubayda と Ḥabīb b. Abī ‘Ubayda も同じようにアンダルス征服に参加し、wujūh の一員とされている。このうち、アブド・アッラフマーン・ブン・アビー・ウバイダについては、アンダルス征服の後イフリーキヤへ戻ったことしか伝えられていないが<sup>(10)</sup>、重要なのはハビーブ・ブン・アビー・ウバイダの方である。アンダルスの征服後、指揮官ムーサー・ブン・ヌサイル Mūsā b. Nuṣayr がシリアへ凱旋した際、ハビーブはアンダルス総督となったムーサーの息子アブド・アルアズィーズ‘Abd al-‘Azīz と共にアンダルスに残った。その際の彼の立場について、*Bayān* ではアブド・アルアズィーズの補佐役 (wazīr) と表現している<sup>(11)</sup>。また、このアブド・アルアズィーズは西ゴート王家の女性を妻としアンダルスの王としてふるまうようになったとして、97/716年、征服に参加したアラブ戦士たちにより暗殺される。ハビーブ・ブン・アビー・ウバイダはこの暗殺事件の首謀者の一人に数えられている<sup>(12)</sup>。*Qūṭīya* と *Bayān* には、「名士たち (wujūh)」の一員であるハビーブにカリフ・スライマーンがアブド・アルアズィーズ暗殺を指示したともある。このように、ハビーブはアンダルス征服直後の初期移住者たちに大きな影響力を持っていたことがうかがえる。

その後、ハビーブはイフリーキヤへ戻り、イフリーキヤ総督ウバイド・アッラーフ・ブン・アルハブハーブ‘Ubayd Allāh b. al-Ḥabḥāb の命令で現在のモロッコ南部にあたるスース Sūs 地方やシチリアへの遠征を指揮している<sup>(13)</sup>。しかし、シチリア遠征の最中の122/

740年、ハワーリジュ派の影響を受けたベルベルの大反乱が発生すると、総督ウバイド・アッラーフはハビーブに対して「イフリーキヤの人々 (ahl Ifriqiya) と共に [ベルベル反乱の指導者] Maysaraのもとへ出撃するべくシチリアから帰還するよう命令した」という<sup>(14)</sup>。また、そもそもマイサラがこの時期に反乱を起こしたのは、ハビーブがシチリア遠征に向かって留守だったからともいわれている<sup>(15)</sup>。このように、ハビーブは当時のイフリーキヤにおいて軍事的に非常に重要な地位を占めていた。このハビーブの息子が、イフリーキヤに半独立の政権を樹立したアブド・アッラフマーン・アルフィフリーであり、その甥がアンダルスに半独立の政権を樹立したユースフ・アルフィフリーである。

しかし、こうしたフィフル家と呼ばれる人々の全てが、ウクバの子孫というわけではない。例えば、ウクバとは別のムハーリブの系統に属する者にアンダルス総督のアブド・アルマリク・ブン・カタン‘Abd al-Malik b. Qaṭan (在任114/732~116/734, 123/741年) が挙げられる。彼は、114/732年にトゥール・ポアティエ間の戦いで前任の総督が戦死すると、後任の総督に就任した。一旦はイフリーキヤ総督により解任されたものの、ベルベル反乱を機に、再び総督位を奪取した人物である<sup>(16)</sup>。

また、107/725-6年にアンダルス総督‘Anbasa b. Suḥaym がやはり遠征の途上で戦死したのに伴い、新たに総督位についたウズラ・ブン・アブド・アッラーフ・アルフィフリー‘Udhra b. ‘Abd Allāh al-Fihri (在任107/725-6年) もやはり、フィフル家の人物とされている<sup>(17)</sup>。ただし、彼がどういう系譜の持ち主であるかについては、不明である。

今挙げた二人のフィフル家に属するアンダルス総督は、ウクバ・ブン・ナーフィーの子孫ではない。しかし、史料からはいずれもウクバの子孫と親密な関係を結んでいたことがうかがえる。例えば、ウクバの子孫であるアンダルス総督ユースフ・アルフィフリーは、その娘 Umm Mūsā をイブン・カタンの息子 Qaṭan b. ‘Abd al-Malik と結婚させている<sup>(18)</sup>。また、ユースフ・アルフィフリーは総

督の位に就くと、かつてイブン・カタンが十字架にかけられ処刑された場所にモスクを建設し、それまでその場所が「イブン・カタンの十字架の場 Maṣlab Ibn Qaṭan」と呼ばれていたのをやめさせている。このとき、史料ではユースフ・アルフィフリーとイブン・カタンとの関係を「叔父の息子 ibn ‘amm」と表現している<sup>(19)</sup>。実際のいところではないが、同族との認識が両者の間にあったことがうかがえる。

また、この「叔父の息子」という表現は、イブン・カタンとイフリーキヤ総督アブド・アッラフマーン・アルフィフリーとの間にも用いられている<sup>(20)</sup>。さらにアブド・アッラフマーン・アルフィフリーが、殺されたイブン・カタンの復讐を行ったことも伝えられている<sup>(21)</sup>。ユースフ・アルフィフリー同様にアブド・アッラフマーン・アルフィフリーにとっても、イブン・カタンは同族であるとの意識が働いていたのである。

アンダルス総督ウズラの場合は、彼自身とウクバの子孫との関係は不明だが、その息子ヒシャーム・ブン・ウズラ Hishām b. ‘Udhra<sup>(22)</sup>が、イブン・カタン同様にウクバの子孫と親密な関係にあったことが分かる。彼は、アンダルス総督ユースフ・アルフィフリーの下で、トレド太守をつとめており<sup>(23)</sup>、また後ウマイヤ朝のアブド・アッラフマーン1世がコルドバを占領した後も、ユースフ・アルフィフリーの再起の企てに対して協力した人物である。二人はやはり「叔父の息子」の間柄と表現されている<sup>(24)</sup>。

以上見てきたように、Fihriと呼ばれているのは、その多くがウクバ・ブン・ナーフィーの子孫である。しかし、それ以外にもウクバの子孫たちと親密な関係にあったクライシュ族の者たちが Fihri と呼ばれている。

図1の系図からも明らかなように、フィフル家の祖とされるハリスとムハーリブは系譜上あまりに離れすぎている。この二つの系譜に属する人々が同じようにフィフル家と呼ばれるようになったのは、8世紀にムハーリブ系のイブン・カタン一族と、ハリス系のウクバ・ブン・ナーフィーの子孫たちとが婚姻関係などで密接な



つながりを強めていったことによるのではないだろうか。イブン・カタンにとっては、ジハードの戦士ウクバの子孫と同族であるかのように振る舞うことは、自己の初期移住者内部での立場にプラスの影響を与えたであろう。また、ウクバの子孫たちにとっても、初期移住者の中に同族と見なせる有力な一族を増すことは、有利と判断されたに違いない。このように、彼らは積極的に他の一族との関係を強めていったのである。

## 2 フィフル家の権力基盤

次に、このようなフィフル家がイフリーキヤ、アンダルス地方の有力者として台頭し得た権力基盤について考えてみたい。

まず、彼らの経済的基盤としては、フィフル家がイフリーキヤ、アンダルスの征服に参加したアラブ戦士の子孫であることから、征服の分け前として彼らが多くの戦利品や捕虜を得たことが想定できる。征服後も、スースやシチリア、ピレネー越えなどの遠征により、徐々に減少しながらも彼らの戦利品収入は継続していたと考えられる<sup>(25)</sup>。

また、フィフル家が広大な私領地を有していたことも、断片的な史料からうかがうことが出来る。イフリーキヤ総督アブド・アッラフマーン・アルフィフリーが保有していた私領地について、*Raqīq* は、次のように伝えている<sup>(26)</sup>。

(アブド・アッラフマーン・アルフィフリーを殺したその弟イリヤース Ilyās b. Ḥabīb が) カイラワーンに戻ると、彼のもとに (アブド・アッラフマーン・アルフィフリーの息子) ハビーブ Ḥabīb に関する不快な情報が入った。すなわち、父親の広大な私領地 (ḍiyā') において、ハビーブが人々を反乱へとそそのかしているというのである。

このように、アブド・アッラフマーン・アルフィフリーの私領地は、息子ハビーブが挙兵する際の重要な根拠地となっている。ただし、この私領地の場所は分からない。

同様に、アンダルス総督ユースフ・アルフィフリーも、総督位就

任前に居住していたイルビーラ Ilbira 近郊に私領地 (ḡiyā') を保有していたことが、伝えられている<sup>(27)</sup>。ユースフ・アルフィフリーは、ウマイヤ家のアブド・アッラフマーン 1 世にコルドバを追われた後、イルビーラで再起を果たそうとしている。その際にこのイルビーラ近郊の私領地が重要な役割を果たしたことは間違いない。

また、フィフル家はいざという時に招集して軍事力とし得るようなマワーリーをも保有していた。例えば、コルドバの郊外でユースフ・アルフィフリーとアブド・アッラフマーン 1 世が戦った際のユースフ・アルフィフリー側の軍隊編成は以下のようなものである<sup>(28)</sup>。

全てのムダル族とシリア人の騎兵 (khayl min ahl al-Shām wa Muḡdar kull-hā)

歩兵 (rajjāla)

歩兵の集団 (jamā'a rajjāla)

ベルベルから成る家来とグラームの騎兵 (khayl ghilmān-hi wa ṣanā'i'-hi min al-Barbar)

ここから、ユースフ・アルフィフリーの軍の中には、ベルベルのマワーリーと見られる部隊が存在していることが分かる。

このようなマワーリーは、征服の過程でフィフル家に分配された捕虜たちで、後に解放された者たちと思われる。この過程を裏付ける史料は存在しないが、フィフル家に仕えるマワーリーの存在は随所で確認できる。

例えば、アブド・アッラフマーン 1 世に総督位を追われたユースフ・アルフィフリーが再起してセビーリヤを攻撃した際、両軍からマウラーが出て来て一騎打ちをした。その際、ユースフ側からは「フィフル家のマワーリーに属するベルベルの男 (rajl min mawālī Fihir min al-Barbar)」が出て来たという<sup>(29)</sup>。

また、ユースフ・アルフィフリーとは別系統になるが同じフィフル家出身のアンダルス総督イブン・カタンもマワーリーがその遺体を十字架から降ろしてどこかへ待ち去ったことを史料は伝えている<sup>(30)</sup>。

一方、イフリーキヤでもフィフル家に仕えるマワーリーの例が見いだされる。例えば、アブド・アッラフマーン・アルフィフリーの弟イルヤースがチュニスの大反乱軍の首領と一騎打ちした際、アブド・アッラフマーン・アルフィフリーのマワーリーのうちの一人が彼に加勢したという<sup>(31)</sup>。

このようなマワーリーは、フィフル家にとって極めて重要な軍事力として扱われていた。例えば、イフリーキヤのフィフル家の内紛に関して、次のような史料がある<sup>(32)</sup>。

(アブド・アッラフマーン・アルフィフリーの息子) ハビーブは彼(父親を殺した叔父イルヤース)に言った。「どうして、我々のマワーリーや家来たち (mawālī-nā wa ṣanā'ī'-nā) を我々の間 [の戦い] で殺すことがあろうか。彼らは我々にとっての砦 (ḥiṣn) ではないか。しかしながら、私とあなたが一騎打ちをし、そしてどちらかが相手を殺して、安堵しよう。もし、あなたが私を殺せば、私を私の父のもとにやるがよい。もし、私があなたを殺せば、私の反乱は成就したことになる。」

このように、マワーリーはフィフル家を守る「砦」であり、彼らが初期移住者の名士としての地位を維持するための重要な軍事力だったのである。

こういった経済的・軍事的基盤に加えて、フィフル家が他の初期移住者と比して名士たり得るための要因として、彼らの血統の高貴さが考えられる。フィフル家は、既に述べたようにウクバ・ブン・ナーフィーの子孫を中心としている。ウクバは、ジハードの戦士、イフリーキヤの征服者として非常な尊敬を受けていた<sup>(33)</sup>。このウクバの名声はその子孫たちにも受け継がれている。例えば、イフリーキヤ総督アブド・アッラフマーン・アルフィフリーとウクバの名声について、史料には次のような記述がある<sup>(34)</sup>。

アブド・アッラフマーン・ブン・ハビーブ・アルフィフリーは彼(当時のイフリーキヤ総督ハンザラ・ブン・サフワーン Ḥanzala b. Ṣafwān) に対して反乱を起こした。彼(アブド・アッラフマーン) は、その祖先ウクバ・ブン・ナーフィーがこの辺境でなした

事績のゆえにその地に慕われていた (muḥabbab)。そしてこの辺境を手に入れ、ハンザラを追い出した。

また、アンダルス総督となったユースフ・アルフィフリーも同様に、ウクバの子孫として尊敬を受けていたことを示す史料がある<sup>(35)</sup>。

彼 (ユースフ・アルフィフリー) の祖先は、イフリーキヤの支配者にしてカイラワーンの建設者、神の使命に応え、数々の称賛すべき戦いと事績を残したウクバ・ブン・ナーフィーである。この一族 (bayt) は、イフリーキヤとアンダルスの支配 (salṭana) において名声 (nabāha) を博していた。

このように数世代前の英雄ウクバ・ブン・ナーフィーの存在が、イフリーキヤとアンダルスの初期移住者の中でのフィフル家の高い名声を支えていたのである<sup>(36)</sup>。

今までに述べてきたように、フィフル家は征服に伴う戦利品の分配と土地の保有、大量のマワーリーによる私的な軍事力の形成、そしてウクバの子孫としての名声ゆえに初期移住者の中でも、指折りの名門となり得たのである。

### 3 初期移住者の中のフィフル家

では、こうしたフィフル家と他の初期移住者とはどのような関係にあったのだろうか。フィフル家は、数多くの初期移住者の中でも最有力の家系であった。それゆえ、イフリーキヤ、アンダルスに非常事態が生じた際には、初期移住者の支持を集め彼らの利害を代表するフィフル家の姿が見られた。

このような非常事態の例として、総督の戦死が挙げられる。107/726年、ピレネーを越えて南フランスに遠征していたアンダルス総督‘Anbasa b. Suḥaymが戦死した。その際、初期移住者たちはフィフル家のウズラ・ブン・アブド・アッラーフを後任の総督として選出した<sup>(37)</sup>。

また、122/740年、タンジェでベルベルの大反乱が生じ、この反乱はアンダルスにも飛び火した。この反乱に対し当時のアンダルス総督‘Uqba b. al-Ḥajjājは有効な対策を講じることが出来なかつ

た。そこで、123/740-1年、初期移住者たちは彼を追放し、代わってフィフル家のイブン・カタンを総督に選出した<sup>(38)</sup>。また、この総督交替の背景には、初期移住者への租税徴収を強化するウクバ・ブン・アルハッジャージュの政策に対する初期移住者の不満も指摘されている<sup>(39)</sup>。

このように、非常事態に際し中央から派遣された総督を頼りと出来ない時には、初期移住者はしばしばフィフル家の者を臨時の総督に選んだのである。

123/741年、ベルベルの大反乱を鎮圧するため派遣された約3万のシリア軍がイフリーキヤに到着した後、初期移住者とシリア軍との間には深刻な軋轢が生じる。このシリア軍に対しても、フィフル家が初期移住者の代表としてふるまう姿が見られる。

例えばイフリーキヤでは、シリア軍とフィフル家のハビーブ・ブン・アビー・ウバイダとの間の次のような話しが伝えられている<sup>(40)</sup>。

[シリア軍先鋒の指揮官] バルジュ・ブン・ビシュル Balj b. Bishr がカイラワーンに到着すると、彼は言った。「カイラワーンの者どもよ、シリアの兵士たちが寝所を見つけるまでお前たちの[家の]門を閉じるな。」カイラワーンの住民はこの言葉に怒った。そしてイフリーキヤのアラブは、その時既にベルベル軍と対陣していたハビーブ・ブン・アビー・ウバイダに向けて手紙を送った。その手紙の中には「あなたは敵(ベルベル)と戦っています。しかし、こちらの敵(シリア軍)は既に我々の所にやって来て我々の家を寝所にしようとしています」とあり、バルジュが言った言葉も伝えた。そこでハビーブは[シリア軍の総指揮官] クルスーム・ブン・イヤード Kulthūm b. 'Iyād に手紙を送った。「あなたの愚かな甥(バルジュ)が我々の土地の住民(ahl balad-nā)にかくかくしかじかと語った。我々に手綱をかけてあなたにつなぐ(ḥawwala-nā a'inna al-khayl ilay-ka) ことのないよう、あなたの軍勢を彼ら(カイラワーンの住民)のもとから出発させて欲しい。」クルスームは手紙を書いてハビーブに詫言した。

このように、フィフル家のハビーブはイフリーキヤの初期移住者から頼りにされ、その代表者としてシリア軍の横暴に抗議していたのである。また、この直後、シリア軍が既にベルベルと対陣していたハビーブの軍と合流した時の次のような事件も伝えられている<sup>(41)</sup>。

先鋒を率いてハビーブの軍と合流したものの、バルジュは彼を嫌い軽蔑した。そして、人々に向かって彼を侮辱しおとしめる演説を行った。「この男は手綱で我々につながれている (yuh-awwal a'inna al-khayl ilay-nā)」。すると当時まだ若かったアブド・アッラフマーン・ブン・ハビーブが立ち上がり、「おい、バルジュの母親の息子！ このハビーブに対して、やれるものなら、やってみろ！」と言った。そして人々に向かって「武器だ、武器だ！」と叫んだ。すると、イフリーキヤの者たちは一方の側に立ち、エジプトの者たち<sup>(42)</sup>もそちらの側についた。それに対して、シリアの者たちは別の側に立った。そして、剣が抜かれた。…… (刊本の註によると、この先、写本が不明瞭)

この事件も、よそのものであるシリア軍に対して、イフリーキヤの初期移住者がフィフル家のハビーブやアブド・アッラフマーン・アルフィフリーの下に結束している様子をうかがわせる。

同様にアンダルスでも、シリア軍に対してフィフル家を中心に初期移住者が結束する様子が見られる。クルスームに率いられたベルベル反乱鎮圧軍は大敗北を喫し、生き残ったバルジュ・ブン・ビシュルは敗軍を率いてアンダルスへ逃れた。しかしまもなく、シリア軍を率いるバルジュはフィフル家出身のアンダルス総督イブン・カタンを殺害して自ら総督を名乗り、アンダルスでもシリア軍と初期移住者との抗争が始まった。この際、初期移住者側の指導者となったのは、殺害された総督イブン・カタンの二人の息子 Umayya b. 'Abd al-Malik と Qaṭan b. 'Abd al-Malik であった。さらに、やはりベルベルに敗れてアンダルスに敗走していたフィフル家のアブド・アッラフマーン・アルフィフリーもイブン・カタンの二人の息子に加勢している。彼らはコルドバがバルジュに占領された後、一旦北方へ逃げ、トレド、サラゴサ、ナルボンヌなどにおいて初期移住

者を結集し、シリア軍に数倍する軍勢を集めたという<sup>(43)</sup>。

このように様々な局面で初期移住者の代表としての役割を果たしたフィフル家は、アンダルスとイフリーキヤに半独立の政権を樹立する際にも、何らかの形で初期移住者の支持を得ていた。

イフリーキヤでは、126/744年、カリフ・ワリード2世が殺害されシリアで内乱が生じると、カイラワーンに残っていたシリア軍の多くがシリアへ帰還した。そこで当時チュニスにいたアブド・アッラフマーン・アルフィフリーは、チュニスの初期移住者たちに自分への支持を呼びかけた。人々はそれに応えてカイラワーンへと進軍した。そのため、シリアから派遣された総督ハンザラ・ブン・サフワーンは戦わずしてカイラワーンを明け渡し、シリアへと戻った<sup>(44)</sup>。

アンダルスの場合には、イフリーキヤの場合とは政権樹立の事情が少々異なる。当時、アンダルスは、シリア軍の流入に伴う初期移住者とシリア軍の抗争、そしてシリア軍内部のヤマン Yaman とカイス Qays・ムダル Muḍar の党派抗争で混乱状態にあった。9世紀の歴史家 al-Rāzī を引用する *Nafh* によれば、シリア軍の有力者スマイル al-Ṣumayl b. Ḥātīm が、クライシュ族であるという理由でユースフを選び、それにアンダルスの人々 (ahl al-Andalus) と二つの党派ムダルとヤマンが従ったという<sup>(45)</sup>。初期移住者、ムダル・カイス、ヤマンいずれにとっても受け入れられる最大公約数的な存在としてフィフル家のユースフ・アルフィフリーが選ばれたと思われる。

このように、アンダルスとイフリーキヤでは、フィフル家政権成立の過程はかなり異なっている。しかし、両者とも初期移住者を代表し得るフィフル家の出身だったからこそ、政権獲得に成功したのである。

しかしながら、フィフル家政権はその後も初期移住者から支持され続けたわけではない。フィフル家政権の樹立後は、イフリーキヤ、アンダルスの双方において、しばしば初期移住者による抵抗が見られた。例えばイフリーキヤにおいては、チュニスの人々 (ahl Tūnis) を率いた 'Urwa b. al-Zubayr al-Ṣadafī の反乱<sup>(46)</sup>、海岸地

帯のアラブ ('Arab al-Sāḥil) を率いた Ibn 'Aṭṭāf al-Azdi の反乱<sup>(47)</sup>, ベルベルのサンハージャ族とも呼応したクライシュ族のムハンマド・ブン・アムル Muḥammad b. 'Amr の反乱<sup>(48)</sup>などが生じている。アンダルスにおいても, ナルボンヌの 'Abd al-Raḥmān b. 'Alqama al-Lakhmī の反乱<sup>(49)</sup>, イフリーキヤで反乱を起こしたムハンマド・ブン・アムルの兄弟アーミル・アルアブダリー 'Āmir al-'Abdarī がサラゴサ近辺で起こした反乱<sup>(50)</sup>などが例として挙げられる。

こうした初期移住者の反乱は, フィフル家と同様に wujūh と呼ばれる初期移住者の名士たちが指導している。特にイフリーキヤのムハンマド・ブン・アムルとアンダルスのアーミル・アルアブダリーは, 中でも最も有力な wujūh と言える。二人の家系は, フィフル家と同様にクライシュ族に属し, その先祖はバドルの戦いで預言者ムハンマドの旗手をつとめた Muṣ'ab の兄弟であるという<sup>(51)</sup>。ウクバ・ブン・ナーフィーの子孫であるフィフル家にまきるともおとらない血統といえよう。

また, 経済的にも, 彼らはかなり裕福であった。例えば, アーミル・アルアブダリーは, コルドバの西の郊外に農園 (munya) を所有し, アーミルの運河 (qanāt 'Āmir) と呼ばれる運河も引いていた。アーミル・アルアブダリーは, ユースフ・アルフィフリーと対立するようになると, ここを城壁で囲んでまるで都市 (madīna) のようにしたという<sup>(52)</sup>。

このようなアーミル・アルアブダリーとユースフ・アルフィフリーの力関係を示すのが次の *Akhbār Majmū'a* の記述である<sup>(53)</sup>。

[ユースフ政権を支持するシリア軍のスマイルがサラゴサ太守に任じられ, コルドバを離れていたので] ユースフの力 (sulṭān) は弱く, 彼の警護兵 (ḥasham) には50騎しかいなかった。そのためアンダルスの人々は彼を軽んじた。ユースフは, アーミルが望んでいること (ユースフに対する反乱) を知っていたので, 彼を捕えようとして見張っていた。しかし, ユースフは臆病で, スマイルが彼のそばに戻って来るまでアーミルとの戦



いを望まなかった。

このように、アーミル・アルアブダリーは、フィフル家のユースフ・アルフィリーを怯えさせるほどの存在だった。フィフル家の経済力、軍事力は他の名士たちと比べて、決して圧倒的な優位にあったわけではないのである。

こうした初期移住者の名士たちがフィフル家政権に対して抵抗するようになった理由は、はっきりとは分からない。しかし、フィフル家政権の総督としての正当性に、趣問が投げかけられていたことは指摘できる。確かに、フィフル家政権はカイラワーンやコルドバを手中にした後、ウマイヤ朝やアッバース朝のカリフからその地位を承認されてはいた<sup>(54)</sup>。しかし、この承認はウマイヤ朝末期、アッバース朝成立当初の混乱に乗じてフィフル家政権が獲得したものに過ぎず、カリフの意向を反映したものではない。現に、アーミル・アルアブダリーはサラゴサで挙兵する際、アッバース朝カリフ・マンスールからアンダルス総督としての書き付け (sijill) を受取っていた<sup>(55)</sup>。しかも既に指摘されているように、フィフル家はイフリーキヤ、アンダルスの双方において総督位の世襲を準備している<sup>(56)</sup>。他の初期移住者の名士たちにとっては、必ずしもカリフにより正当性が保障されているわけではないフィフル家が総督位を独占することに、根拠は見出せなかったに違いない。

フィフル家は、確かに相対的に多くの財産やマワーリーを保有し、血統に由来する尊敬も受けてはいた。しかし、他の初期移住者たちに対して絶対的な優位を保っていたわけではない。アーミル・アルアブダリーやムハンマド・ブン・アムルの兄弟に見られるように、財産、血統の面でフィフル家に匹敵するような名士たちも少なからず存在していた。フィフル家は、時に初期移住者全体の利害を代表する立場に立つことはあっても、彼らが相対的な第一人者の域を超えることは決してなかった。

ターハが指摘しているように、初期移住者の最大の関心事は征服者としての既得権益の保持である<sup>(57)</sup>。その目的にかなうならば、フィフル家は初期移住者の代表となり得たし、その目的の障害と判

断されれば、フィフル家政権も初期移住者の抵抗を招くことがあり得たのである。

#### 4 初期移住者と後ウマイヤ朝

では、これら初期移住者たちは、138/756年にコルドバを占領した後ウマイヤ朝のアブド・アッラフマーン1世に対してどのような対応をとったのだろうか。最後にその点について、触れておきたい。

アブド・アッラフマーン1世の政権を支えたのは、東方から亡命して来たウマイヤ家の一族、そのマワーリー、そしてすでにアンダルスに定住していたシリア軍だった<sup>(58)</sup>。シリア軍は、初期移住者と同じ従軍の義務を負うにもかかわらず、アブド・アッラフマーン1世によりウシュル税を免除されていたという<sup>(59)</sup>。このため、シリア軍の反乱はアブド・アッラフマーン1世の治世後半にはほとんど見られなくなる。

その一方で、初期移住者とシリア軍との間には、対立感情がより高まっていた。フィフル家政権の時代にはユースフ・アルフィフリーを支援していたシリア軍のスマイルも、アブド・アッラフマーン1世に対するユースフの反乱の企てにもはや同調することはなかった。また、メリダで反乱を起こしたユースフ・アルフィフリーがセビーリャに進軍すると、セビーリャの初期移住者 (ahl al-balad) は皆全てユースフのもとに参じたが、セビーリャのシリア軍はウマイヤ家の一族であるセビーリャ太守のもとに集まったという<sup>(60)</sup>。

また、ウマイヤ家の一族やそのマワーリーに対しても、初期移住者たちは反感を抱いていた。これをよく表すのが、次の *Akhhbār Majmū'a* の記述である。これは、ユースフ・アルフィフリーがイルビーラでアブド・アッラフマーン1世に降伏し、コルドバに戻った後の記述である<sup>(61)</sup>。

ウマイヤ家の人々やそのマワーリーが [東方から] 次々にやって来て、その数は増大した。一方、コルドバにはハーシム Hāshim 家、フィフル家、その他クライシュの諸族、そしてその

マワーリー、その他の名家 (buyūtāt) が既において、ユースフ・アルフィフリーの時代には高い地位 (rif'a wa manāzil) を得ていた。しかし、[ウマイヤ家の一族やそのマワーリーの到来で] それらは彼らから奪われてしまったので、彼らはユースフ・アルフィフリーのもとへ通い、事態の変化を告げ、かつてしたこと (アブド・アッラフマーン 1 世に降伏したこと) を悔やむよう求めた。

このように、新たに到来したウマイヤ家やそのマワーリーたちは、初期移住者にとっては自分たちの権益を脅かしかねないよそのだった。したがって、アブド・アッラフマーン 1 世の治世を通じて、初期移住者による反乱が相次いだのである。

こうした初期移住者の反乱の中心になったのは、先の史料の引用からも明らかのように、再び初期移住者の利害を代表するようになったフィフル家である。ユースフ・アルフィフリーは、セビーリヤ攻略に失敗してトレドへ向けて敗走する途中に暗殺されたが、彼の息子 Muḥammad は、169/785-6年にトレドの近辺で反乱を起こしている<sup>(62)</sup>。また、場所は不明だが、ユースフの兄弟 Qāsim b. 'Abd al-Raḥmān も171/787-8年、アブド・アッラフマーン 1 世に対して反乱を起こした<sup>(63)</sup>。

他の例でも、フィフル家はしばしばアブド・アッラフマーン 1 世への反抗の核となっていた。例えば、アンダルス総督ウズラ・ブン・アブド・アッラーフの息子ヒシャーム・ブン・ウズラである。セビーリヤ攻略に失敗したユースフ・アルフィフリーは、ヒシャーム・ブン・ウズラが抛るトレドで再起を果たそうと敗走する途上で暗殺された<sup>(64)</sup>。ヒシャームがユースフ・アルフィフリー政権のもとでトレド太守をつとめていたことを考えると、アブド・アッラフマーン 1 世がコルドバを占領した後も、トレドは実質上このヒシャームの支配下にあったものと考えられる。その後も、ヒシャームは147/764-5年に至るまでアブド・アッラフマーン 1 世への抵抗を続けている<sup>(65)</sup>。

しかし、反乱の中心になっているのはフィフル家だけではない。

他の初期移住者の名士たちもやはり、フィフル家と同様の役割を果たしていた。例えば、トレドでヒシャーム・ブン・ウズラと共にアブド・アッラフマーン 1世への抵抗を指導した人物に、‘Uthmān b. Ḥamza al-‘Umārī がいる。彼は第2代正統カリフ・ウマルの子孫とされており、やはり高貴な血統の人物として扱われている<sup>(67)</sup>。

サラゴサにおいてもトレド同様、初期移住者によるアブド・アッラフマーン 1世への根強い抵抗が、165/781-2年まで見られた。ここで反乱を指導したのは、フサイン・ブン・ヤフヤー al-Ḥusayn b. Yaḥyā al-Anṣārī とスライマーン・ブン・ヤクザーン・アルアアララービー Sulaymān b. Yaqzān al-A‘rābī の二人である<sup>(68)</sup>。このうち、フサイン・ブン・ヤフヤーは、預言者ムハンマドに協力したアンサールの最有力者 Sa‘d b. ‘Ubāda の子孫とされている。また、もう一人のスライマーン・ブン・ヤクザーン・アルアアララービーについては、ほとんどの史料が Kalb 族の出としているが、Qūṭīya のみは彼の名を Muṭarrif b. al-A‘rābī と表記し、第4代正統カリフ・アリーの子孫としている。サラゴサにおいても、フィフル家にも劣らぬ高貴な血統の者たちが反乱の指導者となっていたのである。

こういった初期移住者の反乱は、地域的には、メリダ、トレド、サラゴサ、あるいはアンダルスの東海岸地方で生じている。東海岸地方を除いて、この分布はアブド・アッラフマーン 1世を支えるシリア軍の駐屯地域からは、ちょうどはずれた形になっている。シリア軍は125/743年に、当時のアンダルス総督から、イルビーラ、ハエン、ライヤ、セビーリヤ、シドニア、ベジャ、トゥドミールといった主にアンダルスの南部地域を駐屯地として割り当てられている<sup>(69)</sup>。

初期移住者の反乱がこうしたシリア軍の駐屯地域からはずれた所で頻発しているということは、逆にいえばそれ以外の地域では、アブド・アッラフマーン 1世の支配は極めて不安定だったということでもある。こうした地域では、後ウマイヤ朝の成立後も初期移住者たちが依然として地方支配を継続していたのである。

## おわりに

征服に従事したアラブ初期移住者たちは、土地や動産など征服の果実を手に入れることによってアンダルス支配層となった。しかし、その征服の果実はその土地の外からやって来たよそものによって、しばしば脅かされるものでもあった。こうした危機的状況に際して初期移住者の結集の核となったのが、高貴な血統を持つフィフル家に代表される名士たちである。こうした状況は、フィフル家のユースフ・アルフィフリーが殺された後も変わらなかった。トレドやサラゴサの反乱に見られるように、初期移住者の名士たちは、アブド・アッラフマーン1世の治世を通して反抗を続けたのである<sup>(70)</sup>。

確かに、トレドにおいてもサラゴサにおいても、彼らの反抗はアブド・アッラフマーン1世により、とりあえず鎮圧された。しかし、コルドバの後ウマイヤ朝の支配が完全にこれら初期移住者の間に浸透したと考えるのは間違いであろう。サラゴサ周辺においては、次のヒシャーム Hishām 1世（在位172/788-180/796年）の治世に、フサイン・ブン・ヤフヤーやスライマーン・ブン・ヤクザーンの息子たちが、再びサラゴサを奪おうとしている<sup>(71)</sup>。また、トレドにおいてもヒシャーム1世の兄弟スライマーン Sulaymān の反乱に初期移住者が同調している<sup>(72)</sup>。初期移住者、特にコルドバから離れた辺境地帯に住む彼らは、依然として後ウマイヤ朝の支配になびこうとしない存在であり続けたのである。

9世紀以降、後ウマイヤ朝ではアブド・アッラフマーン2世（在位206/822-238/852年）の下で、行政機構の整備や非自由身分から成る軍隊の拡充などを通して支配体制の強化がはかられる<sup>(73)</sup>。こうした状況下で、地方の初期移住者たちがどのように後ウマイヤ朝の支配下に組み込まれていったのか、あるいはそれに対してどのように抵抗していったのかについてが、今後の検討課題となろう。

また、本稿ではアラブ初期移住者に焦点を当てたが、後ウマイヤ朝支配の障害になり得るような地方有力者には、他にキリスト教徒

の先住民やその改宗者たち、あるいはベルベルも考えられる。後ウマイヤ朝にとっての彼らの存在や彼らと初期移住者との関係などについても、今後の検討課題としたい。

## 註

- (1) E. Manzano Moreno, *La Frontera de al-Andalus en época de los Omeyas*, Madrid, 1991, pp.387-9.
- (2) これはイラクの研究者ターハの early settlers という訳語にならったものである。A. Dh. Ṭāha, *The Muslim Conquest and Settlement of North Africa and Spain*, London, 1989, pp.115-118. 同じ意味で, ahl al-Andalus や ahl Ifriqiya という言葉もよく用いられる。
- (3) シリア各地に駐屯する軍団 (jund) は、ウマイヤ朝末期には最精鋭の軍団として、しばしば反乱鎮圧や不穏な地域の治安維持に用いられた。アンダルスとイフリーキヤには、122/740年のベルベル反乱をきっかけに大量に導入された。
- (4) イフリーキヤ Ifriqiya とは、狭義では現在のチュニジアを中心とする地域を指すが、広義ではエジプト以西の北アフリカ、すなわちバルカ Barqa からタンジェ Ṭanja までを指す。本稿で扱う8世紀にはこの広い意味で用いられていた。cf. al-Ḥimyarī, *Al-Rawḍ al-Mi'tār fī Khabar al-Aqṭār*, I. 'Abbās ed., Bayrūt, 1975, p.78.
- (5) Ṭāha, *The Muslim Conquest and Settlement*.
- (6) H. Djaīt, Note sur le statut de la province d'al-Andalus de la conquête à l'instauration de l'émirat omayyade (93-138/711-756), *Cahiers de Tunisie*, vol.16, 1968, pp.7-11; P. Guichard, *Al-Andalus : Estructura antropológica de una sociedad islámica en Occidente*, Barcelona, 1976, pp.526-534.
- (7) *Nafh*, I, pp.290-291. なお、マッカリーは同じ箇所でも、アンダルスでクライシュ家 Qurashiyūn として知られるのはウマイヤ家のことであるとも述べている。いずれの表現も、アンダルスでウクバ・ブン・ナーフィーとアブド・アッラフマーン1世の子孫が有した影響力の大きさに由来するものであろう。
- (8) *Bayān*, I, p.27.
- (9) *Nafh*, I, pp.287-288; *Nafh*, III, p.10; *Raḥīq*, p.44; al-Ḥimyarī, *al-Rawḍ al-Mi'tār*, p.33.
- (10) *Nafh*, III, p.25.

- (11) *Bayān*, II, p.23.
- (12) *Futūḥ Miṣr*, p.211-213; *Raḡīq*, p.54, 59-60; *Qūṭīya*, p.36; *Akhbār Majmū'a*, pp.27-29; *Fath al-Andalus*, pp.22-23; *Bayān*, I, p.47; *Bayān*, II, pp.23-25.
- (13) *Futūḥ Miṣr*, p.217; *Raḡīq*, pp.72-73; *Bayān*, I, p.51.
- (14) *Raḡīq*, p.74; *Bayān*, p.53.
- (15) *Raḡīq*, p.73.
- (16) *Qūṭīya*, p.39; *Akhbār Majmū'a*, p.35; *Fath al-Andalus*, pp.29-30; *Raḡīq*, p.75; *Bayān*, I, p.54; *Bayān*, II, p.30; *Nafḥ*, I, pp.19-20; *Chr.* 754, p.45.
- (17) *Bayān*, II, p.27; *Chr.* 754, p.39.
- (18) *Akhbār Majmū'a*, p.70.
- (19) *Nafḥ*, III, p.19. cf. *Akhbār Majmū'a*, p.45.
- (20) *Nafḥ*, III, p.21. なお、この表現はユースフ・アルフィフリーとアブド・アッラフマーン・アルフィフリーの両総督の間柄にも用いられている (*Bayān*, II, p.46) が、この場合は実際のいとこである。
- (21) *Futūḥ Miṣr*, p.221.
- (22) *Nafḥ*, III, pp.17-18; Ibn al-Athīr, *Al-Kāmil fī Ta'rikh*, C.J. Tornberg ed., Bayrūt, 1965-66, V, p.527. なお、彼の名については Hishām b. 'Urwa al-Fihri とする史料も多い。cf. *Akhbār Majmū'a*, pp.84, 91-92, 95; *Bayān*, II, p.53; *Fath al-Andalus*, p.61. しかし、アラビア文字で表記した際の類似性や、校訂者が参照した写本も書写生により 'Udhra, 'Urwa, 'Uzra の三種類の名前が出てくることから、'Urwa は 'Udhra の誤りと考えられる。cf. *Nafḥ*, III, p.17, n.3; *Bayān*, II, p.53, n.1. なお、ヒシャームの父ウズラの名は、8世紀のラテン語史料に Hodera と表記されていることから、'Udhra が正しい。 *Chr.* 754, p.39.
- (23) *Akhbār Majmū'a*, p.84.
- (24) *Fath al-Andalus*, p.61; *Akhbār Majmū'a*, p.84.
- (25) 例えば、フィフル家のハビーブ・ブン・アビー・ウバイダが指揮したスースやシチリアへの遠征では、多くの金銀 (dhahab wa fiḡḡa) や捕虜 (sabi) が得られたという。 *Raḡīq*, p.72.
- (26) *Raḡīq*, p.99.
- (27) Ibn al-Khaṭīb, *Al-Iḥāṭa fī Akhbār Gharnāṭa*, Muḥammad 'Inān ed., al-Qāhira, 1973-8, 4vols., IV, p.340.
- (28) *Akhbār Majmū'a*, pp.81-82.

- (29) *Akhbār Majmū'a*, p.90.
- (30) *Akhbār Majmū'a*, p.45; *Nafh*, III, p.19.
- (31) *Raḡīq*, p.91.
- (32) *Raḡīq*, p.101.
- (33) やがて、この尊敬が高じて13世紀にはウクバの墓が、聖者崇拜の対象として巡礼の場にまでなっている。*Hulla*, II, p.323; al-Harawī, *Kitāb al-Ishārāt ilā Ma'rifa al-Ziyārāt*, Janine Sourdell-Thomine ed., Damas, 1953, pl. Iに掲載のケンブリッジ大学所蔵写本 (Qq. 92, fol. 63b) の写真。この写本は、al-Harawīの著作と別の人物の著作が一つにバンドルされている。
- (34) al-Balādhurī, *Futūḥ al-Buldān*, M.J. de Goeje ed., Leiden, 1968pepr., p.232.
- (35) *Nafh*, III, p.25.
- (36) ウクバの子孫ではないが、イブン・カタンも高貴な家系 (ex nobili familia) の出とされている。*Chr* 754, pp.43-44.
- (37) *Bayān*, II, p.27; *Nafh*, III, p.18.
- (38) *Qūṭīya*, p.39; *Akhbār Majmū'a*, p.35; *Faḥ al-Andalus*, pp.29-30; *Raḡīq*, p.75; *Bayān*, I, p.54; *Bayān*, II, p.30; *Nafh*, III, pp.19-20; *Chr*. 745, p.45.
- (39) Ṭāha, *The Muslim Conquest and Settlement*, p.197.
- (40) *Raḡīq*, pp.76-77. cf. *Bayān*, I, p.54.
- (41) *Raḡīq*, p.77, cf. *Futūḥ Miṣr*, p.219; *Bayān*, I, p.55.
- (42) クルスムに率いられたシリア軍は、途中エジプトやトリポリに立ち寄って軍勢を招集している。*Raḡīq*, p.76; *Akhbār Majmū'a*, p.36.
- (43) *Futūḥ Miṣr*, p.220; *Akhbār Majmū'a*, pp.44, 46; *Bayān*, II, p.32; *Nafh*, I, pp.236-237; *Nafh*, III, p.21; *Chr*. 754, p.47.
- (44) *Futūḥ Miṣr*, p.223.
- (45) *Nafh*, III, p.25.
- (46) *Raḡīq*, pp.90-91. *Raḡīq* を引用した *Bayān* では 'Urwa b. al-Walid と表記が異なっている。cf. *Bayān*, I, pp.60-61.
- (47) *Raḡīq*, pp.88-89; *Bayān*, I, p.61.
- (48) *Hulla*, II, p.344.
- (49) *Bayān*, II, p.38; *Nafh*, III, p.26. 彼は、イブン・カタンの二人の息子がシリア軍に抵抗した際、ナルボンヌの初期移住者を率いてこれに協力している。
- (50) *Qūṭīya*, p.46; *Jamhara*, p.126; *Akhbār Majmū'a*, pp.63-64; *Hulla*,



- II, pp.344-345; *Fatḥ al-Andalus*, p.46; *Bayān*, II, pp.38, 42; *Nafḥ*, III, p.26.
- (51) *Jamhara*, p.126; *Akḥbār Majmū'a*, p.63. 東
- (52) *Akḥbār Majmū'a*, p.63. 洋
- (53) *Akḥbār Majmū'a*, p.63. 学
- (54) al-Balādhurī, *Futūḥ al-Buldān*, p.232; *Raḥīq*, p.95; *Bayān*, I, pp. 60, 64. 報
- (55) *Jamhara*, p.126; *Akḥbār Majmū'a*, p.63; *Ḥulla*, II, pp.344-345.
- (56) Guichard, *Al-Andalus*, pp.542-543.
- (57) Ṭāḥa, *The Muslim Conquest and Settlement*, p.187.
- (58) Ṭāḥa, *The Muslim Conquest and Settlement*, p.248.
- (59) *Al-Iḥāṭa*, IV, pp.104-105.
- (60) *Akḥbār Majmū'a*, p.88.
- (61) *Akḥbār Majmū'a*, p.87.
- (62) *Bayān*, II, p.57; *Akḥbār Majmū'a*, p.105.
- (63) *Bayān*, II, p.58.
- (64) *Akḥbār Majmū'a*, p.91; *Fatḥ al-Andalus*, pp.60-61; *Bayān*, II, p. 50.
- (65) *Akḥbār Majmū'a*, p.95; *Fatḥ al-Andalus*, pp.61-62, 63; *Bayān*, II, p.53.
- (66) *Fatḥ al-Andalus*, p.67; *Bayān*, II, p.55-56.
- (67) *Jamhara*, pp.153-154; *Fatḥ al-Andalus*, p.61; *Akḥbār Majmū'a*, p.92; *Bayān*, II, p.53. なお *Bayān* の刊本では、彼の名をウスマーンではなくヒシャームとしているが、*Bayān* の校訂者が利用した写本にもウスマーンとするものがあるということから、ウスマーンが正しいであろう (cf. *Bayān*, II, p.53, n.3)。ヒシャームとするのは、もう一人の指導者フィフル家のヒシャーム・ブン・ウズラに引きずられた誤りと考えられる。
- (68) *Qutīya*, p.54; *Jamhara*, p.365; *Fatḥ al-Andalus*, p.67; *Akḥbār Majmū'a*, pp.102-103; *Bayān*, II, p.56.
- (69) Ṭāḥa, *The Muslim Conquest and Settlement*, pp.132-150.
- (70) 同様にイフリーキヤでもよそものアグラブ朝に対して初期移住者の反乱が頻発している。cf. *Ḥulla*, I, p.102.
- (71) *Bayān*, II, p.62.
- (72) *Bayān*, II, p.62.
- (73) E. Lévi-Provençal, *Histoire de l'Espagne Musulmane*, 3toms.,

Paris, 1950-1953, I, pp.193-202.

8世紀  
アン  
ダ  
ル  
ス  
と  
イ  
フ  
リ  
ー  
キ  
ヤ  
に  
お  
け  
る  
ア  
ラ  
ブ  
初  
期  
移  
住  
者

佐  
藤

第  
七  
十  
七  
卷

三  
四  
七